心の冒険教育の考え方を生かした学校づくり

いの町立伊野南小学校　　教諭　　田所　三佳

心の冒険教育の考え方を生かした「効果的な支援の方法」と「協働的な視点に立った学校づくり」について提案できるよう、先進県の情報収集を行い、県内各校で実際に子どもたちや教職員の活動を支援する研究を進めてきた。このことをもとに支援に生かせることを考察し、子どもたちの人間関係を育む効果的な活動プログラム案に心の冒険教育の視点を明示することや、教科の授業への考え方を生かした支援や工夫の導入を具体的に示すこと、さらに協働的な視点を学校づくりのどの場面でどのように活用していけるのかについて提案する。また、事例集を作成し、考え方を生かした効果的な支援の方法について、多くの教職員に紹介していきたい。

キーワード：心の冒険教育の考え方、効果的な支援、活動プログラム、教科への導入、協働的な視点

1　はじめに

高知県ではこれまでに、高知県の教育課題である不登校やいじめ、少年非行などの未然防止の視点から授業改善や人間関係づくりの様々な手法を活用した取組が進められてきている。その中で高知県が平成 13 年度から導入した心の冒険教育は、子どもたちの「心の安全や安心」に焦点を当て、具体的な体験の中で子ども自身が「自ら気づき、学び、感じる」ことで、安心して学べる環境づくり、個人の内面的成長やお互いの信頼関係づくりをめざし、不登校やいじめ、少年非行などの未然防止に役立てようとするものである。

昨年度までの研究経過の中で、心の冒険教育の普及と導入を目的として、学校での人間関係づくりを進めるための実践プログラムづくりや教職員への幅広い導入を図る研修システムづくり、研修受講者へのフォローアップの提案が行われ、今年度の研修体系に生かされてきている。これらの成果をもとに、心の冒険教育の手法だけでなく手法を活用する上で大事にしている考え方の面を伝え広げていくことで、人間関係づくりや学校づくりにさらに生かせるのではないかと考えた。

心の冒険教育の考え方には、「フルバリューコントラクト（相手にとっても自分にとってもお互いに安心できる居心地のよい環境をつくるために何が必要かを考え、それを言葉や行動に表していくことを約束しあうこと）」、「チャレンジバイチョイス（今の自分に何ができるかを考え、自分の意志でその内容や方法を選択し、主体的に行動すること）」、「ゴール設定（個人やグループが具体的で分かりやすい目標を持つこと）」、「体験学習のサイクル（体験から学んだことをふりかえり、それを次の体験に生かし、日常生活にも生かすこと）」の４つの柱がある。

この４つの考え方を生かした効果的な支援の方法や、協働的な視点に立った学校づくりの普及と導入を図ることで、子どもたちや教職員が「心の安全や安心」を得て、子ども同士や子どもと教職員、教職員間の信頼関係や温かな人間関係づくりが進められ、豊かな人間関係を育む、魅力ある学校づくりにつながるのではないかと考える。

2　研究目的

(1)　子どもたちの信頼関係を築くことができる、効果的な支援の方法を提案する。

(2)　心の冒険教育の考え方を生かし、協働的な視点に立った学級経営・学校づくりを提案する。

３　研究内容

(1)　研修

①　県内外の講座を受講…ＰＡＪ主催・心の教育センター主催

ＰＡＪ(プロジェクトアドベンチャージャパン)主催のＡＢＣ（アドベンチャーベースドカウンセリング）講習会、ファシリテータートレーニングに参加し、フルバリューコントラクトの具体的な取り入れ方や目標を設定するときの留意点、グループと個人が人間関係や信頼関係を築いていく過程、支援者がグループや個人の状態を観察していく視点、ねらいに近づける活動を組み立てる際の留意点などについて、実際に体験することを通して学んだ。また、全国各地からの参加者との交流の中で、プロジェクトアドベンチャーの手法や考え方が学校教育だけでなく、野外教育活動や社会教育活動、企業などにも広がっていることが分かり、考え方を生かしていくためのいろいろな視点や活用の場を探るための情報を得た。

心の教育センター主催の心の冒険教育講座初級・中級・上級では、それぞれの受講者と共に具体的な活動の体験を通して理論や技法を学んだ。特に、本講座では学校の活動に取り入れやすく準備が容易で手軽に楽しめるアクティビティも多く、対象に応じて活動のレベルを工夫することやアクティビティを行いながら学びの環境に気づかせていくことなど、子どもの発達段階や活動の場所、ねらいに合わせたプログラムを作成する上で参考になることが多くあった。

②　先進県訪問…ＰＡＪスタッフに同行し、山口県・宮城県へ

国立山口徳地少年自然の家では、「徳地アドベンチャー教育プログラム（ＴＡＰ）」と呼ばれる体験学習の開発が進められている。同行した指導者講習会では、主にローエレメントを用い目的に応じた効果的な使い方や安全管理のポイントなど、指導者としてのスキルを学んだ。

国立花山少年自然の家では、プロジェクトアドベンチャーの考え方を生かした不登校児童生徒へのプログラムとＡＩＴＣ（アドベンチャーインザクラスルーム）講習会に参加した。不登校児童生徒へのプログラムでは、活動の中でチャレンジバイチョイスが生かされるような環境づくりをすることで子ども自身の気づきが高められ、意識や行動の変容に結びついていたことが分かった。

ＡＩＴＣ講習会では、宮城県が進めているＭＡＰ（みやぎアドベンチャープログラム）が、アクティビティを取り入れて活動することだけが実践ではなく、学ぶ環境づくり・安心して学べる関係づくりを意識しながら教科や学校のあらゆる教育活動に体験学習のサイクルを取り入れた学習を実践していくことをねらいとしていること、常に体験学習のサイクルを回すことを意識し支援や工夫をすること、学びを支援する教師が多様な観察の視点を持っておくことなどを学んだ。

(2)　実践

①　各学校で支援者として多くの経験を積むことができた。小学校では北原小学校、梼原小学校、伊野南小学校、初月小学校、土佐山小学校、東中筋小学校、中学校では高岡中学校、芸西中学校、後川中学校、土佐山中学校、伊野南中学校、高等学校では城山高校、大栃高校、高知北高校、嶺北高校、大方商業・大方高校、窪川高校において児童生徒または教職員のグループに支援者としてかかわることができた。

活動のねらいは「友達のよさに気づく」「人とかかわる楽しさを体験する」ことが中心であったが、それぞれのグループごとの状況を考えて活動を支援する中で、活動の組み方や、声のかけ方、進め方などについて具体的に学ぶことができた。グループの持つ人間関係の課題を事前の情報や活動時の観察から見取り、ねらいをもってグループの課題に合った活動を考えていくことの大切さを支援者としての体験から学ぶことができた。

②　わくわく心の冒険教育児童生徒体験会…ＰＡＪスタッフによるスーパーバイズ

心の冒険教育講座を受講した人が子どもたちに授業をし、授業実践後にプロジェクトアドベンチャージャパンのスタッフにスーパーバイズを受け、スキルアップを図った。

そのふりかえりの中で特に、「仲間づくりや人間関係づくりをねらいとして活動を支援する際に、教師のかかわり方や言葉がけの違いで子どもたちに育ってくるものも違う。教師が発する言語的・非言語的メッセージを子どもたちがどういうメッセージとして受け取るだろうということをイメージしておくことが大事。」「学びの環境をつくることを意識して活動の流れを考える。」「活動中に見えた姿、聞こえた声、感じたことからねらいを達成する要素に合った活動を考える。」「体験から学ぶということを意識し、子どもたちがお互い同士で学ぶ、お互い同士から学ぶ、人とのかかわりの中で学ぶ時間を増やす工夫をすること。」など、人間関係づくりをねらいとした活動だけでなく活動を行う際に大事にしていることは子どもたちのあらゆる学びの場で生かしていけるということが分かった。

また、心の冒険教育の普及という目的で教職員の活動を支援する際には、「活動の体験を通して学んだことを子どもたちに返してもらう、生かしてもらう。」という視点が必要であり、「具体的にどの考え方をどういうところで生かしていけるのか。」「その考え方を理解して使ってもらうためにどのような体験を提供すればよいのか。」などについて考えておく必要があることが分かった。

③　事例集の作成

心の冒険教育について多くの教職員に理解を広めるために、年間計画に基づいた活動プログラム案や教科の授業案などを事例集としてまとめている。

4　考察

(1)　効果的な支援の方法について

①　アクティビティがもつ意味の把握

プログラムの中では、アクティビティと呼ばれるいろいろな活動を行うことが多いが、一見すると遊びやゲームのように見える活動がなぜ人間関係づくりに有効なのかを考えると以下のことが挙げられる。

ア　楽しさの中でいつの間にか普段の言動や人とのかかわり方が見えたり、普段はおとなしい子の意外な姿が見えたりすることから、子どもたち同士のかかわり方の様子がつかみやすく、人間関係づくりの上での課題を知ることができる。

イ　活動を通して人間関係づくりやかかわり合いの具体的なスキルを学ぶことができる。

ウ　グループのメンバーの共通体験の場となる。

エ　課題解決のための具体的な方法（話し合いの仕方、アイデアを出し合うこと、課題や情報を共有すること、失敗から学ぶこと、再チャレンジすることなど）を人とかかわりながら体験を通して学ぶことができる。

オ　４つの考え方を生かしている場面を、活動を通して体験することができる。

カ　活動を通して無意識の自分の行動や感情が見え、自分の行動を変容することで行動も変容することを感じたり体験したりすることができる。

キ　それぞれのアクティビティがもっている力を利用し、ねらいをもって成長を支援する機会となる。また、そこでは支援者の観察と工夫により、様々な創造性を生かすことができる。

これらのことは、特別活動の学級活動の内容（２）日常生活や学習への適応及び健康や安全に関することに示されている「望ましい人間関係の育成」に深く関係しており、明確なねらいをもってアクティビティを行うことで、人間関係の育成を図ることにつながると考える。

②　プログラムづくりと活動を進めるときの留意点

このことについては、教科や領域での授業を組み立てるときや授業を進める際に留意することと共通した点が多くある。例えば、対象とするグループや個人の心や身体の状態、グループと個人の関係、課題などの実態を把握しておくこと、その状態によっては個別での対応など他の方法が有効な場合もあること、どのような人間関係づくりのねらいをもっているのか、それがどのよ

うな姿として見えてくると考えているのか、ねらいに迫る活動に向けてスモールステップでつながりや準備ができているか、活動の様子を多様な視点で観察し、状態によっては代替案を行うなど柔軟に対応していくことなどである。

特に考え方を生かした大事な点として以下のことが挙げられる。

ア　学び合う環境づくりができているかどうか。

イ　身体の安全と心の安全に十分配慮した活動内容やプログラムの流れになっているかどうか。

ウ　体験学習のサイクルが回っているかどうか、今の活動や今の状況は体験学習のサイクルのどこを進んでいるのかを意識すること。

③　ふりかえりのポイント

学びを大きくし、よりねらいに近づけるためには活動後のふりかえりが重要となってくる。体験からの気づきや学びを整理し意味づけをすることで、より活動のねらいに近づけることを目標にふりかえりを行う。活動中にどんな姿が見えたり、どんな声が聞こえたり、どんなことを感じていたかなどを中心にふりかえっていくが、ふりかえりの方法もグループの状態や活動の内容によって工夫し、選択して行うことが有効である。

ア　ふりかえりの時間だけでなく、活動中に見られた姿やことば、動作などを見取って、肯定的な言葉で教師が子どもに返してあげることも、有効な意味づけとなる。

イ　いろいろな表現方法を準備しておくことで、意味づけや共有がしやすくなる。子どもの発達段階によって言葉での表現が難しい場合なども考えられるので、ポストカードや表情カード、顔文字カードなどを使って今の気持ちに気づかせる方法を工夫する。ふりかえりカードを活用することも有効である。

ウ　活動をふりかえった後､次に生かせることはどんなことか、次にやるときにはどうするかという具体的なアクションプランを持たせることで、日常生活につなぎやすくなる。

エ　活動の前にねらいを意識づける言葉がけや働きかけをしておくことで、ふりかえりも焦点化しやすくなる。

オ　ふりかえりの形態も２人組、数人のグループ、グループ全員で輪になってなど、その時の活動内容や状況によって話しやすい形態を選ぶ。

写真１　表情カード（註１）

(2)　協働的な視点に立った学級経営・学校づくりについて

ここで言う協働的な視点は、教職員が子どもの学びを支援するときの共通認識、子どもを中心としてつながりを持てる環境づくりと考える。４つの考え方をどの場面に生かしていくかということについては、創造性を働かすことができると考える。

①　意識しておきたい視点（共通認識）

学びの主体は子ども		教　師
・目標設定 ・自己決定 ・かかわり合い ・ルールづくり ・体験学習	←	・児童生徒観 ・教育観 ・支援のあり方 ・指示の出し方 ・介入の仕方 ・学習形態の工夫 ・評価の視点など

図１　考え方を生かし意識しておきたい子どもへの視点

学びの主体は子どもであるという視点から、子どもが「自分で選ぶこと・決めること」「かかわり合いの中で育つ」「安心して学び合えるルールづくり」「教え込むより体験から気づかせること」「体験からくりかえし学ぶこと」を意識しておくことで、今まで行っていた指導や支援に付け加え、今までとは違った視点から子どもの気づきを引き出したり、気づきを高めたりする支援をすること、いろいろな学習形態や学習方法を工夫すること、評価の視点も結果だけでなく過程も重視することなどに生かされてくると考える。

② 共有の場づくり（環境づくり）

ア 目標設定とふりかえり

考え方を生かした学級づくりの具体例として、学級経営案の活用について挙げてみる。それぞれの学校教育目標から学級目標を設定し、学級経営案を作成し、実践に取り組み、学期ごとに自己評価をしているが、その際に４つの柱の一つ「ゴール設定」の考えを活用する。例えば「分かりやすいこと・実現可能なこと・過程も確認できること・結果を測れること・一つだけであること」を生かしたより具体的な行動目標を立てておく。そして、月ごとや学期ごとに目標をふりかえり、達成できたこととできにくかったことを明らかにしながら、次からも続けていけることは何か、次はどうするかを考え、目標を修正しながら具体的な実践に取り組んでいく。過程でのふりかえりと目標設定を繰り返すことで、子どもの成長の状態に合わせた具体的な取組を進めることができる。

イ 目標の共有と情報交流の場

目標達成の過程を目に見える形で表しグループで情報共有・情報交流する方法の一つとして、「ビーイング」がある。例えば、学年団や所属部員が、全員で達成したい目標を決め、それぞれが目標達成のために今の自分に何ができるかを考え、具体的行動目標を書き込む。個人とグループの目標や成果、サポートが必要なところなどを共有し合うことができ、過程で書き換えたり付け加えたりしながら実践し目標達成を目指していく。

写真２　ビーイング

５　まとめ

心の冒険教育の考え方を生かした効果的な支援について２点提案する。

(1) 心の冒険教育の視点を明示した活動プログラム案の例

これまでに提案されてきた活動プログラム案との相違点は、活動案の中にそれぞれの活動を支援する際に教師が意識しておきたい心の冒険教育の考え方の要素を、分かりやすく具体的な言葉で明示したことである。そうすることで、４つの考え方のどこを生かしているのか、ねらいに向けて人間関係づくりのどのような具体的な支援をするかを意識していくことができるのではないかと考える。

① 題材名　　力を合わせて（学級活動（２）ウ．望ましい人間関係の育成）

ア 対象学年…４学年

イ 目標…個々の身体の動きや力の強さの違いを、活動を通して感じる。
相手の動きに合わせること、合わせてもらうことを体験する。
運動会に向けて互いに協力し、一人一人の力を生かし合うことへの意識を持てるようにする。

ウ　学習の流れ

段　階	活　動　の　内　容	心　の　冒　険　教　育　の　視　点
身体・ 心ほぐし	1　クィックチェック （今の気持ちや身体の状態のレベルを、指サイン１から５で表す。）	・自分の身体や心の状態を知る。 ・お互いの身体や心の状態を知っておく。
	2　インパルス （拍手などの簡単な合図を、隣の人に伝えていく。）	・円になり全員で一つのことに取り組む。 ・気持ちや意識を「今ここ」に向ける。 ・周りの人の動きを、少し意識してみる。
	3　ミラーストレッチ （２人組で向かい合い、相手の動きをもう片方の相手が真似て同じ動きをする。）	・身体の緊張をほぐす。 ・無理のない動きを、一人一人で考えてみる。 ・２人組で人に動きを合わせること、人が動きを合わせてくれることを体験する。その中で感じたことや気づいたことを大切にする。
	4　東西南北 （真ん中に立つ人を一人決め、その人を中心に４つのグループが前後左右に分かれ、１列に並んだままで真ん中の人の動きについていく。）	・少人数のグループで人に動きを合わせることの楽しさと難しさを体験する。その中で感じたことや気づいたことを大切にする。 ・安全に気をつけながら、動きの意外性を楽しむ。
課題解決	5　風船運び （グループごとに縦一列に並び、前の人との身体の間に風船をはさんだままでゴールまで移動する。）	・お互いの動きを感じながら動いてみる。 ・お互いの動きをどう合わせるか、アイデアを考えてみる。アイデアを聞き合い、伝え合う。 ・アイデアを出し合いながら、くり返しチャレンジする。
ふりかえり	6　ふりかえり	・人と動きを合わせたときにどう感じたか、うまく合わなかったときにどうしたかなどの気づきを、２人組または活動をしたグループで話し合う。 ・今日の活動で感じたことから、運動会にむけて生かせそうなことはないかを聞いてみる。

(2) 教科の授業に導入する例

さらに効果的な支援の方法として、教科の授業への心の冒険教育の考え方を生かした支援や工夫の導入を考えた。教科の授業においても人間関係づくりを意識した学習活動を工夫することで、人とのかかわり合いの中で学ぶことや安心して学び合える環境づくりにつながり、体験学習のサイクルを生かしながら学習目標の達成により近づけることができるのではないかと考えた。そこで、これまでの学習指導案の中に、心の冒険教育の考え方を生かした支援や工夫の項目を付け加え、明示しておく形態を考えた。

今回、一例として提案する学習指導案は小学校算数科であるが、どの教科領域であっても学習目標を達成することが最も重要であることに変わりはなく、学習目標を達成する上でも、教師が常に安心して学べる環境づくりや人間関係づくりの視点を持って支援・指導を考えることで、どの教科領域においても考え方を生かした効果的な支援ができると考える。

①　心の冒険教育の考え方を生かした教科学習指導案（算数科）の例

ア　単元名…かけ算（１）

イ　対象学年…２学年

ウ　目標…前時までの学習内容を用い、２の段と５の段の九九を使って課題解決に取り組むことができる。

エ　心の冒険教育の考え方を生かした指導観

課題を児童により身近な内容に設定し、具体物や操作活動を多く取り入れることにした。また、容易な内容から次第に本時のねらいへとステップアップできるように学習の流れを工夫していくことで、子どもたちの関心や意欲を高め、主体的に課題に働きかけることができると考えた。さらに、個人の活動だけでなく友達と２人組で話し合ったり聞き合ったりする活動を意識的に取り入れながら、かかわり合いの中での気づきも大事にしていきたい。

オ　学習の流れ

段階	学　習　活　動	指導上の留意点 （支援と評価の場合もあり）	心の冒険教育の考え方を生かした支援や工夫
導入	１　カードと指を使って２の段と５の段の九九を２人組でお互いに言い合うようにする。	・かける数が１から５までの問題を出し合い、答えを言ったら握手をして、別の相手を見つけてくり返し練習できるようにする。	・かける数を５までにしておくことで、答えやすい問題からチャレンジしていけるようにする。 ・相手を見つけくり返しチャレンジしていき、できるだけいろいろな友達とかかわりを持てるようにする。
展開	２　絵と物語から、これまでに学習した５の段と２の段の九九を使って問題が解けそうだという見通しを持つ。	・絵を見せながら、課題を含んだ物語文を読み聞かせて課題をとらえさせるようにする。	・課題を含んだ物語文は、児童の日常生活を思い起こさせるような設定にし、解決への意欲を持てるようにする。
	３　絵の中のどこに、問題がかくれているかをさがす。	・ワークシートに印刷された絵から「５こずつの〇つ分」「２こずつの〇つ分」になっているものをさがし、丸で囲むようにする。	・２人組で「５こずつ」「２こずつ」を見つけ合い、お互いに確かめ合うようにする。
	４　見つけた問題の式と計算の答えをワークシートに書く。	・見つけた問題のうちの一つを例題として、ワークシートへの書き方を確かめるようにする。	・九九の答えを見つけたり確かめたりするために、おはじきやアレイ図など自分が選んだ方法を使ってもよいことを知らせる。
	５　２人組で答え合わせをする。	・式と計算の答えを確かめるようにする。	・違いがあれば２人で絵やおはじき、アレイ図などを使って話し合いながら、確かめ合う時間を設定しておく。
	６　類似問題を解決する。	・５の段と２の段のどちらを使っても解ける問題をアレイ図で提示し、立式と計算の答えを書かせる。	・２人組で、続いて班の友達との間で、自分の立てた式について考えを出し、聞き合うようにする。
まとめ	７　ふりかえりをする。	・ワークシートに思ったことやわかったことなどの気づきを書くようにする。	・本時の学習をふりかえり、気づいたことを文章で書く、絵や図で表すなど表現方法を各自が選んで行うようにする。

6　今後の課題

今後の研究の課題として次の３点が挙げられる。

(1)　心の安心と学力向上のつながりの検証

心の冒険教育の考え方を生かし、子どもたちに心の安全や安心を築いていくことで、子どもたちが安心して学習に取り組むことができ、学力の向上につながるのではないかと考え、今後の実践を通して検証し、さらに効果的な方法を探ることが重要である。

(2)　全教育活動の中でのかかわり合い

全教育活動の中で４つの考え方を大事にしたかかわり合いを、計画的・日常的に取り組めるよう学校教育計画や年間計画との関連を見直し、実践計画を検討することが重要である。

(3)　職員室と教室からの発信

心の冒険教育の考え方や手法を教育活動に生かしていくためには、段階を踏んで考え方を理解し共通認識してもらう、普及のための取組が重要である。今後も自分が子どもたちに実践していくことと、周りの先生方に伝えていくことの両面から考えていきたい。具体的には、職員会や教育相談関係の部会でのアクティビティや考え方、生かし方の紹介、活動を体験する場の提供、年間計画に関連した活動プログラムの紹介や資料提供などを実践していきたい。また、校内研究テーマと関連して生かせる部分がないかどうかを検討し、具体的な実践計画を提示していきたい。そして、自分の学級での計画的・日常的な取組や授業公開、学級懇談での紹介、学級通信でのアピール、取組後のふりかえりや児童の変容の検証など、身近なところに発信していくことが重要である。

参考文献・参考資料

・（註１）大阪府人権教育研究協議会「今どんな気持ち」ポスター

・プロジェクトアドベンチャージャパン著『プロジェクトアドベンチャー入門・グループのちからを生かす・成長を支えるグループづくり』　Ｃ．Ｓ．Ｌ．学習評価研究所　2005 年

・プロジェクトアドベンチャージャパン翻訳版『アドベンチャーベースドカウンセリング講習会ワークショップマニュアル』　プロジェクトアドベンチャージャパン　2005 年

・独立行政法人国立少年自然の家国立山口徳地少年自然の家『国立山口徳地少年自然の家プロジェクトアドベンチャーマニュアル』　国立山口徳地少年自然の家　2002 年

・藤村寿著『ＡＦＰＹ入門―「やまぐちふれあいプログラム」の理論と実践―』　2005 年

・ＭＡＰ研究会編集・発行『体験を伴った学び―小学校・中学校・高等学校実践例』　2003 年

・宮城県教育委員会編集・発行『みやぎアドベンチャープログラム（ＭＡＰ）指導事例集・教えから学びへ～ＭＡＰを生かした学習支援の実際～』　2004 年

・プロジェクトアドベンチャージャパン翻訳版『アドベンチャープログラミングトレーニングマニュアル』　プロジェクトアドベンチャージャパン　2002 年

・宮地暁男・森浩二編『平成 14 年度紀要　第 39 号　別冊２号』　高知県教育センター　2003 年

・林寿夫・川口博行・新井浅浩共著『アドベンチャー教育で特色ある学校づくり・個性を認め合う体験学習』　学事出版　1999 年

・『わかる楽しい授業をめざして「授業評価システムを生かした授業の工夫・改善」―小学校編』　高知県教育センター　2003 年